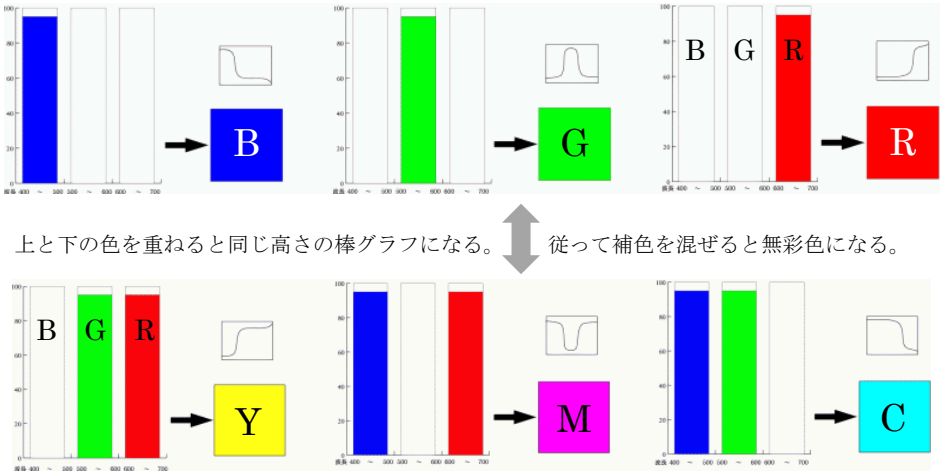
「色彩についての講座」

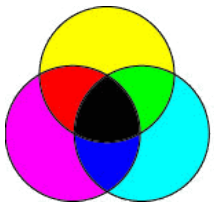
土屋　政夫

第二回　■色彩の基本《三原色》

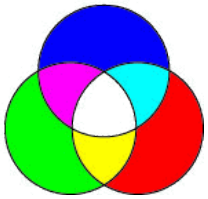
前回の《可視光線》では波長毎に色が変わると言いました。その波長域を三等分し棒グラフで表してみました。左図、上段が光の三原色、下段が色材の三原色です。上下は補色関係にあります。補色を重ねると三本とも同じ高さになります。



三原色の足し算は光（光を出す）と色材（光を吸収）では異なります。



色材の三原色



光の三原色

光の三原色（RGB）を加えていくと明るくなってきます。（加色法）テレビやパソコンなどはこの原理です。
色材の三原色（CMY）を加えていくと暗くなってきます。（減色法）絵の具はこちらです。三色混ぜると理論的には黒ですが、実際は別です。このため印刷では墨（K）インクを加えます。

今後は色材（絵の具）の方だけの話しにします。一般のカラー印刷は色材の三原色と墨を加えた四色（プロセスカラー）で殆どの色を表現可能にしています。世の中の印刷物を見て下さい。色豊富に鮮やかに出来上がっています。絵の具とて同じです。シアン・マゼンタ・イエローで全ての色相を作れます。例えば、グリーンを作るにはイエローとシアンを混ぜます。絵を描く人には直観的に分かりますネ。

上図棒グラフで解説します。Yと C を足すとGが一本分多いのでグリーンになります。勘違いしてはいけないのは絵の具の混色は減色法ですから、残りのRGB三本で無彩色になったその分の光を吸収して明度は落ちますがグリーンに変化させます。

加色法の光は足し算によりエネルギーが強くなり明るくなるのですが、絵の具は吸収して暗くなってしまいます。明度と彩度は落ちていきますが、足す割合で色相を変化させられます。

この意味する所は、三原色の絵の具と白と黒さえあれば概ね事足りると言えるのです。世の中に多様な絵の具が存在するのは高彩度な絵の具を必要とする場合や、混色の手間を省きたいが為です。詳しくは混色の回で・・・

次回は■色彩の基本《色の三要素》

二瓶博厚氏を悼む

東京支部　永野　信

二瓶博厚氏は建築事務所、大学教授引退後、２０１２年から念願の絵の制作に取り組まれ、当会の会員として、また上野の森美術館に連続発表されてきました。

独自の技法による日本画で、当会では芸術新聞社賞、中尾賞、上野の森美術館では最高賞を連続受賞されるなどで、画壇、画商にも注目されたところでしたが去る５月上旬に膵臓がんにより逝去されました。

プロフィール　二瓶博厚

１９４５年　福島県二本松生まれ。東京大学工学部建築学科卒業　同大学院博士課程中退

１９７０年（株）大高建築設計事務所入所

１９９４年東北工業大学工業意匠科教授

２０１２年退任　同年新日美入会

制作を急ぐかアトリエでの二瓶さん

追悼の言葉

東京支部　児玉八千穂

五月末から六月頭に掛けて、日本画会員の二瓶博厚さんの初めての個展が銀座で開かれた。但し、そのほんの半月ほど前に亡くなったので遺作展となってしまった。七十歳だった。

初めて二瓶さんと出会ったのは、平成二十四年秋、区民の日本画公募展の受賞式後の懇親会だった。その時の二瓶さんの作品、これ程乱暴でこれ程印象深い作品を私は見たことがなかった。夕刻の荒川都電だったと記憶している。荒削りなどと言うレベルではなく、まさに情熱だけで描いたようなものだったのだ。それが画業スタートだったと聞いた。

二瓶さんの情熱的な技法は、日本画の常識からはみ出し、被覆力の強い細かい粒子の絵の具に違う粒子のものを混ぜ、油彩画のようにタッチで塗り込めておられたのではないか。構図もテーマも油彩画そのものだった。故人に確かめてみたいがそれも叶わない。

その情熱は、平成二十六年「自然を描く展」で上野の森美術館賞に輝いた時も、その後もずっと衰えを知らず、沢山の作品群を残しての、慌ただしい旅立ちだった。

荒川都電からほんの三年半の出来事だ。実に二瓶さんらしい。嵐のように過ぎ去った情熱の「画家」二瓶さん。

ご冥福をお祈り申し上げる。

「似顔絵通りの朝」
第27回日本の自然を描く展上野の森美術館賞（自由部門）